

イギリス史研究会第 45 回例会のご案内

イギリス史研究会第 45 回例会を下記の要領で開催いたします。今回は、中世イギリス史がご専門の赤江雄一さんにご報告をお願いしています。また、コメンテータには、新井由起夫氏にお引き受け頂きました。ご多忙中とは存じますが、何卒ご出席賜りますようお願い申し上げます。

記

日時 2018 年 10 月 27 日 (土) 午後 2 時 ~ 午後 6 時
会場 お茶の水女子大学文教育学部 1 号館 1 階第 1 会議室

報告者とテーマ

赤江雄一氏 (慶応義塾大学)

「15 世紀イングランドで英語・ラテン語混淆体
で書き記された説教はどの言語でおこなわれたか
-code-switching、説教形式、聴衆-

コメンテータ

新井由紀夫氏 (お茶の水女子大学)

世話役 新井由紀夫 (お茶の水女子大学)

永島剛 (専修大学)

山本信太郎 (神奈川大学)

連絡先: 山本信太郎

Tel: 080-5434-4958

E-Mail: edwardvi@kanagawa-u.ac.jp

※今回のイギリス史研究会は、科学研究費補助金 (基盤 C)

「中世後期イングランドの聖体拝領にかんする説教史料の研究」

(研究代表者: 赤江雄一) との共催となります

以下、赤江雄一氏によるご報告の要旨です。ご参照下さい。

〈報告テーマ〉

15 世紀イングランドで英語・ラテン語混淆体で書き記された説教は どの言語でおこなわれたか

——code-switching、説教形式、聴衆——

赤江 雄一

・ 報告要旨

15 世紀のイングランドからは、ラテン語でおもにかかされているものの、英語がランダムに入り交じっている説教写本が複数存在している。90 年代以降、英文学の研究者たちがこれらの写本の研究及び校訂をおこなってきたが、2000 年代以降、言語学者が code-switching あるいは code-mixing という観点から高い関心を示し研究をすすめてきている。code-switching とは、社会言語学において多言語状況でみられる「複数言語話者あるいは複数方言話者が会話の中で言語や方言を切り替える行為」を指す用語である。その切り替えがひとつの文のなかですら素早く頻繁になされる場合が code-mixing である。

このような code-switching あるいは code-mixing が、聴衆に語られた説教のなかでおこなわれた場合、それはどのような状況だったのだろうか。しかし、そもそも、これらの説教は、ほんとうに混淆体で語られたのだろうか。これらの問いをめぐって 90 年代から論争が続いてきた。

本報告は、ラテン語・英語混淆体で書かれた説教についての近年の研究史を整理したうえで、報告者がこれまで取り組んできた説教形式と「語的一致」という説教テクニックについての研究成果を踏まえつつ、その延長線上で具体例を検討することで、この問題について一定の見通しを示したい。それを通じて、14 世紀から 15 世紀イングランドにおける説教と聴衆のありかたと彼らのリテラシーについてより具体的なイメージをつかむことができるだろう。

主要参考文献

1. 赤江雄一「語的一致と葛藤する説教理論家-中世後期の説教における聖書の引用」ヒロ・ヒライ、小澤実編『知のマイクロコスモス-中世・ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー』（中央公論新社、2014）
2. Yuichi Akae, *A Mendicant Sermon Collection from Composition to Reception: The 'Novum opus dominicale' of John Waldeby*, OESA (Turnhout: Brepols, 2015)
3. Putter, Ad, and Judith Jefferson eds., *Multilingualism in Medieval Britain (c. 1066-1520): Sources and Analysis* (Turnhout: Brepols, 2012)
4. Wenzel, Siegfried, *Macaronic Sermons: Bilingualism and Preaching in Late-Medieval England* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1994)